

# 戦後九州における新発生害虫の記録

九州病虫害防除推進協議会創立35周年記念誌

平成17年5月（2005年）



那の津会（九防協OB会）  
九州病虫害防除推進協議会



# 目 次

1	はじめに .....	永野 道昭	1
2	発刊に寄せて .....	野中 福次	2
3	本冊子を利用される方へ .....		3

## 普通作物の部（水稻・麦・馬鈴薯）

1	イネドロオイムシ（イネクビホソハムシ） .....	4
2	イネミズゾウムシ .....	5
3	ジャガイモガ .....	5
4	スクミリンゴガイ（旧名：ラプラタリンゴガイ） .....	6
5	シロヒトリ .....	7
6	ナガムギカスミカメ .....	8
7	ニワトコフクレアブラムシ .....	8
8	ミナミアオカメムシ .....	8

## 畑作物・飼料作物の部

1	アリモドキゾウムシ .....	10
2	アルファルファタコゾウムシ .....	10
3	イッポンセスジズメ .....	11
4	イモゾウムシ .....	11
5	カンシャコバネナガカメムシ .....	12
6	カンシャクシコメツキ類（オキナワカンシャクシコメツキ、サキシマカンシャクシコメツキ） .....	13
7	サツマイモノメイガ .....	13
8	サトウキビネワタムシ .....	14
9	ソルガムタマバエ .....	14
10	テンサイトビハムシ .....	15
11	ヒエノアブラムシ .....	15
12	ヨツモンカメノコハムシ .....	16

## 野菜・花きの部

1	アキニレハマキワタムシ .....	17
2	アシヒダナメクジ .....	17
3	アシビロヘリカメムシ .....	17
4	アフリカマイマイ .....	18
5	インゲンハモグリバエ .....	18
6	ウスモンミドリカスミカメムシ .....	19
7	ウリミバエ .....	19

8	オンシツコナジラミ	20
9	カギアシゾウムシ	21
10	カキノヒメヨコバイ	21
11	カボチャミバエ	22
12	グラジオラスアザミウマ	22
13	クロスジヒメアツバ	22
14	クロトビカスミカメ	23
15	クロテンオオメシコガ	23
16	ケブカノメイガ	24
17	ゴボウネモグリバエ	24
18	シクラメンホコリダニ	24
19	ショウガクロバネキノコバエ	25
20	シルバーリーフコナジラミ	25
21	シロイチモジヨトウ	26
22	スジブトホコリダニ	27
23	ダイズウスイロアザミウマ	27
24	タバコカスミカメ	28
25	タバコガ	28
26	タマネギバエ	29
27	チビクロバネキノコバエ	29
28	チャノホコリダニ	30
29	ツズリガ	30
30	トマトサビダニ	30
31	トマトハモグリバエ	31
32	トビイロシワアリ	32
33	ナスコナカイガラムシ	32
34	ハイイロサビヒョウタンゾウムシ (トビイロヒョウタンゾウムシ)	33
35	パイナップルコナカイガラムシ	33
36	ハラアカモリヒラタゴミムシ	34
37	バラハオレタマバエ	34
38	ヒメカメノコハムシ	34
39	ハウレンソウケナガコナダニ (オンシツケナガコナダニ)	35
40	マメハモグリバエ	35
41	マルガタツヤヒラタゴミムシ	36
42	ミカンキイロアザミウマ	36
43	ミナミキイロアザミウマ	37
44	ミナミマダラヨコバイ	38
45	モトジロアザミウマ	38
46	ヤサイゾウムシ	39

47	ワタミヒゲナガゾウムシ (コーヒーヒゲナガゾウムシ)	39
48	ワモンヒョウタンゾウムシ	40
49	ワモンノメイガ	40
50	ランヒメハダニ	41

## 果樹の部

1	アカマルカイガラムシ	42
2	イチジクヒトリモドキ	42
3	ウスリーカキカイガラムシ	43
4	オウトウハダニ	43
5	カキクダアザミウマ	43
6	カキヒメハダニ	44
7	カキノヒメヨコバイ	44
8	カツラマルカイガラムシ	45
9	カンザワハダニ	46
10	キクビスカシバ	46
11	キュウシュウヒゲボソゾウムシ	47
12	クビアカスカシバ	47
13	クリハバチ	47
14	クリフシダニ	48
15	クリノミキクイムシ	48
16	クリタマバチ	48
17	クロコガネ	49
18	クワオオハダニ (休眠性ミカンハダニ)	50
19	クワゴマダラヒトリ	50
20	クワノミハムシ	51
21	コガシラアワフキ	51
22	スズキヒメヨコバイ	52
23	チャノキイロアザミウマ	52
24	ツチイナゴ	53
25	トサカグンバイ	53
26	トドマツオオキクイムシ	54
27	ナシマルカイガラムシ (サンホーゼカイガラムシ)	54
28	ナンセイハダニ	54
29	ネギアザミウマ	55
30	ハサミムシ	55
31	ハスモンヨトウ	56
32	バショウゾウムシ (バショウオサゾウムシ)	56
33	バナナツヤオサゾウムシ (バナナクキゾウムシ)	56

34	バナナセセリ	57
35	ヒメコスカシバ	57
36	ヒメグンバイ	58
37	ビワサビダニ	58
38	マツモトコナカイガラムシ	59
39	マンゴーハダニ	59
40	マンゴーキジラミ	60
41	マンゴーシロカイガラムシ	60
42	ミカンコミバエ	60
43	ミカンツボミタマバエ	61
44	ミカンキイロアザミウマ	62
45	ミナミトゲヘリカメムシ	62
46	モモアカアブラムシ	63
47	ランクロホシカイガラムシ	63
48	リュウキュウミカンサビダニ	64
49	リンゴハダニ	64
50	ワモンヒョウタンゾウムシ	64
51	ワタアブラムシ	65
52	ワタミヒゲナガゾウムシ	65
53	<i>Ceroplastes cirripediformis</i> Comstock	66

#### 茶樹・樹木（街路樹）・芝草の部

1	アメリカシロヒトリ	67
2	ウスミドリカスミカメ	68
3	ウスコカクモンハマキ	68
4	キオビエダシャク	69
5	クロボシセセリ	69
6	シバオサゾウムシ	70
7	シバツトガ	71
8	シロオビオサゾウムシ	71
9	台湾カブトムシ（サイカブトムシ）	72
10	チガヤシロオカイガラムシ	72
11	チビコブハダニ	73
12	ナガチャコガネ	73
13	マダラカサハラハムシ（マダラアラゲサルハムシ）	74
14	ヤシオオオサゾウムシ	74
	編集後記・編集関係者・写真提供者	76



成虫 (左)、卵塊 (中)、被害水田 (右)  
スクリムリノガイ (和田 節 氏)



成虫 (左)、水稻の初期被害 (右)  
イネミズゾウムシ (田中 章 氏)



幼虫の加害



成虫



レンゲの被害  
アルファルファゾウムシ (西岡稔彦 氏)

2001/ 4/ 7

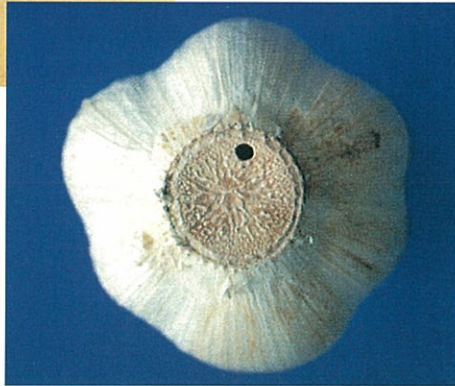




成虫



幼虫



ニンニク食入痕



被害状況

ワタミヒゲナガゾウムシ (永野道昭 氏)



マメハモグリバエ 成虫



マメハモグリバエによるトマトの被害葉  
マメハモグリバエ (大野和朗 氏)



トマトハモグリバエによるメロンの被害葉 (田中 章 氏)





成虫



カボチャ葉の加害状況（シルバーリーフ症状）



トマト黄化葉巻病



トマトの被害果

シルバーリーフコナジラミ（古家 忠 氏）



成虫



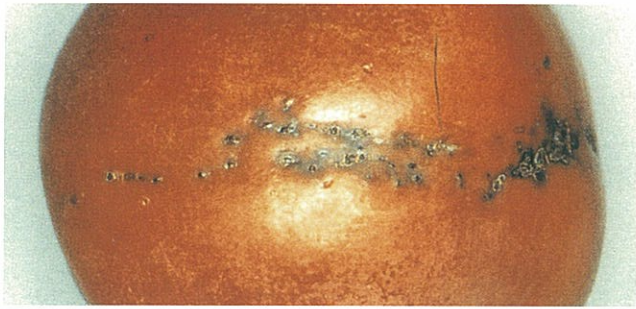
ナスの被害果



ピーマンの被害果

ミナミキイロアザミウマ（大野和朗 氏）





カキの被害果



カキの被害葉

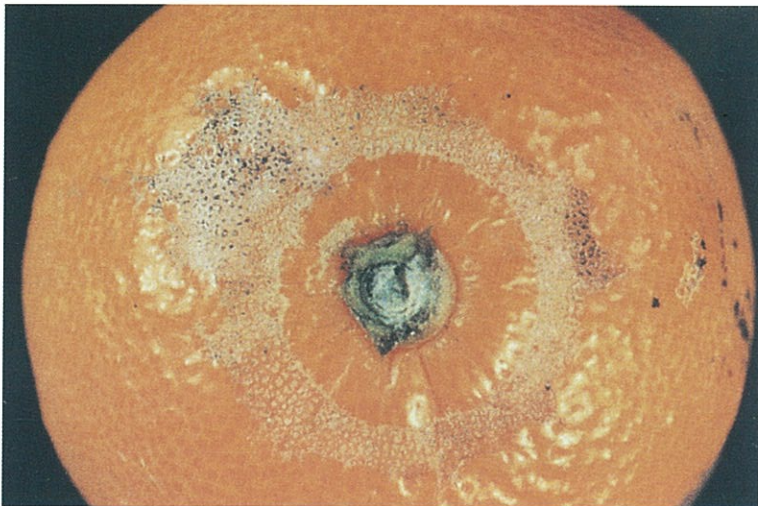


成虫



幼虫

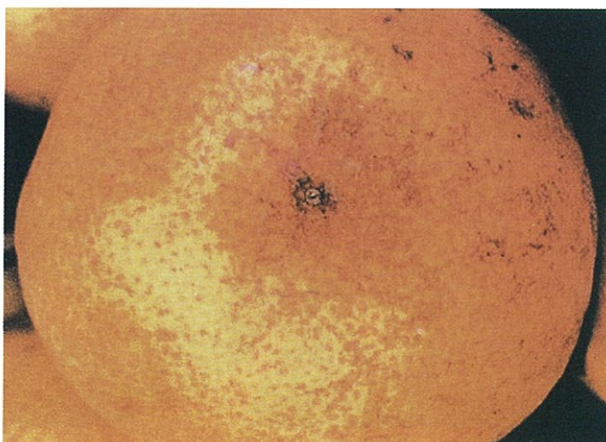
カキクダアザミウマ (山田健一 氏)



ミカン果梗部の被害



成虫



ミカン果頂部の被害



ブドウ穂軸の被害 (右、中央)

チャノキイロアザミウマ (山田健一 氏)





ミカンコミバエ成虫



ウリミバエ成虫



ミカンコミバエによる  
グアバ果実内の幼虫

ミバエ類 (田中 章 氏)



成虫



カキの被害葉

トサカグンバイ (山田健一 氏)



バナナセセリ幼虫  
(田中 章 氏)





成虫



フェニックスの被害

ヤシオオサゾウムシ (阿万暢彦 氏)



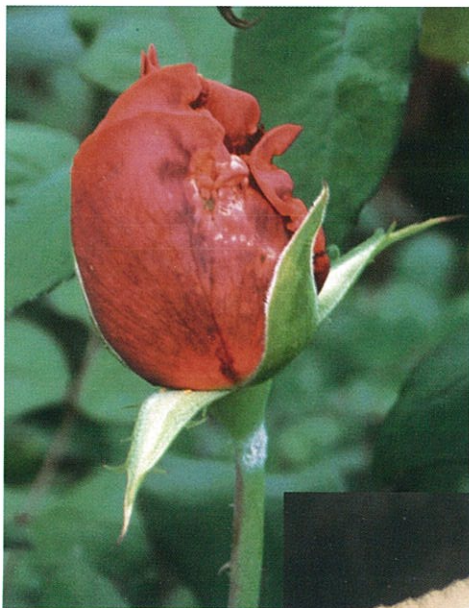
成虫



幼虫

キオビエダシャク (田中 章 氏)

バラ・花の被害



茎葉部の被害



幼虫

バラハオレタマバエ (徳田 誠 氏)

## はじめに

九防協那の津会

会長 永野道昭

2000年5月、九州病虫害防除推進協議会創立30周年記念式典の折りに、九防協那の津会編集・発行の「戦後九州における主要病虫害に対する取り組みの軌跡」(印刷・刊行は九州病虫害防除推進協議会、以下名称は九防協という)以来、5年目にして今回再び、九防協那の津会編集・発行による「戦後九州における新発生害虫の記録」を取り纏めることが出来ました。

本冊子を作成するにあたりましては、野中福次九防協会長の示唆に富む御助言と、御協力を頂きました。本当に有難う御座いました。本冊子の取り纏めは2001年度当初から始め、1～2年もあれば完成出来ると思われましたが、一人の編集者のみでは資料収集・編集(内容・記述の充実)等に意外に手間取ることになり、残念ながら田村多利那の津会会長在任中の2004年3月には発行するに至りませんでした。

近年、天敵微生物等を含めて外来生物の導入が、我が国本来の生態系に影響を及ぼす事例が見られ、特定外来生物専門家会合が開催され、土着の魚類に被害するオオクチバスが近々指定されそうであり、第一次候補として37種の哺乳類・爬虫類があがったとの新聞情報であります。この場では受粉昆虫として国外から導入されたセイヨウオオマルハナバチ・その他も議論の対象になったそうで、天敵や有用生物が国外から盛んに導入されている現状で、本課題の取りまとめは時宜を得た課題であったと思われます。

本冊子の作成は、2004年5月の那の津会総会において、編集委員の増員と会員諸氏の協力・支援が得られることになり、九防協創立35周年記念の出版物として発行することが承認されました。編集にあたられました編集委員・会員諸氏に対し感謝いたします。

また、資料の収集・編集にあたりましては、九州沖縄農業研究センター、九州各県の試験研究機関・病虫害防除所、九州大学・佐賀大学・宮崎大学、鹿児島大学或いは民間関係機関等から多大の御助言と御指導を得ましたことに心より御礼申し上げます。

なお、本冊子には、主として戦後の1945年以降に新たに発生が確認された害虫137種を記載していますが、記載もれになっている種がまだあることと思います。今後共に御教示頂けますようお願いいたします。

本書が少しでもお役に立てれば嬉しく思います。



## 発刊に寄せて

九州病害虫防除推進協議会

会長 野中 福次

この度九防協創立35周年を迎えるに当たり、那の津会（九防協OB会）有志により、「戦後九州における新発生害虫の記録」を編集・執筆していただき、このように立派な冊子を上梓することが出来ましたことは、この記念事業に素晴らしい"はなむけ"を添えていただくこととなり、衷心よりお礼申しあげる次第であります。

その内容を拝見しますと、1945（昭和20）年以降九州地域の主要作物に新に発生が確認された137種の害虫について、それらの発生記録、発生拡大の経過、さらには被害の実態等が詳細に記載され、その上各害虫についての参考資料・文献も併記されていて、膨大な記録集となっています。約2年間に亘ってそれぞれの資料を持ち寄り、度重なる編集会議を開き、熱のこもった検討を経て作成されたその経緯をかいま見てきた私にとりまして、これだけ綿密な記録集を編集・執筆された有志のご苦勞に対し、深甚なる敬意と謝意を表したいと思えます。

さらに、執筆に当たられた方々は戦後食料の安定生産に病虫害防除の面で中心的な役割を果たして来られた人達で、ここに記されている害虫の被害に直接携わりその体験に基づいての記載であることから、余人ではなし得ない貴重な記録集であるということです。これはまた、先の30周年記念に那の津会によって編集・執筆された「戦後九州における主要病虫害に対する取り組みの軌跡」の続編的な性格の刊行物で、この2冊は戦後九州における病虫害の発生の歴史を知ることが出来る貴重な資料であると思えます。

終わりに、上梓に当たりご協力いただいた那の津会永野道昭会長を始め、編集・執筆された有志の方々及び那の津会会員の皆様に厚くお礼申し上げます。

## 本冊子を利用される方へ

- 1 本冊子が新発生害虫として掲載しているものは、主として戦後（1945年以降）、九州地域で発生が確認されたものです。
- 2 海外からの侵入種、九州以外の日本内地からの移動・持込種、或いは、元来古くから野外に生息していた種であっても栽培環境・食性等の変化により新たに害虫として防除の対象になったものを取り上げています。
- 3 今回は、沖縄県独自の害虫・桑の害虫・線虫類・有害鳥獣類については、記載していません。
- 4 本冊子では、九病虫研会報、植物防疫、応動昆会報、各県の発生予察特殊報などから新発生害虫を選択しましたが、地域によっては新害虫として記録されている種が、まだ多くあることかと思えます。お気付きの害虫・種類がありましたら、九防協那の津会事務局へ御連絡下さいますようお願い致します。今後、追捕版として出せればいかと思っています。
- 5 本冊子の町村名は、合併前の旧市町村名で記載しています。



## 普通作物の部（水稻・麦・馬鈴薯）

### 1 イネドロオイムシ（イネクビホソハムシ）

*Oulema orzae* Uwayama

（わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過）

稲作害虫として古くから北海道、本州、四国、九州、台湾、南欧州で発生が知られていたようである①②③。

北海道、東北、北陸地方など寒冷地の稲でよく発生して葉を食害し、分けつ・穂数の減少、生育遅延等の被害により減収となる③④。

（九州における初発生の記録）

分布は、北海道、本州、四国、九州、中華民国である③。という記載があることから九州でも早くから発生を見ていたようであるが、初発生の記録は確認出来ない。

また、「四国にありては香川、徳島の両県、九州にありては大分県に僅かに本種の存在を認められると雖も、いずれも害虫として考慮すべき程度の発生を見ず、その他の地方には未だ之が発生の記録なし」という記載がある⑤。

九州では、英彦山系、阿蘇山系等の山間地で発生がみられていたようであるが、1953年大分県下山田町毛谷村の水田で発生したのが、九州における初発生記録と思われる⑥。

1980年7月には大分県内で発生していることが記録されている⑧。

1994年7月中旬には幼虫の多発を受けて著害を受けた地区があるとの記録がある⑦。

（九州における発生・拡大の経過）

過去の記録では福岡県、佐賀県、大分県で発生が認められており、1955年頃は大分県、福岡県の山間地で発生したが⑥、1980年には大分県下の日田市、耶馬溪町等の水田で再発生・加害していることが確認されている⑥。

1980年7月には大分県で本虫の発生を記録しており⑧、さらに1991年7月には標高500～600mの山間地に位置する宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町で、発生が認められている⑨。

九州では主に福岡県（英彦山系）や大分県（英彦山系、九重山系水分峠付近）などの中山間部に発生する⑩。

（参考資料）

①桑山 覚 (1965) 植物防疫 19 (12) : 17—18

②北海道農園芸害虫目録 (1926) 42 : 33

③高橋雄一 (1949) 実験防除農業害虫篇 養賢堂 : 68—69

④岩田俊一 (1975) 植物防疫 29 (12) : 24 —26

⑤桑山 覚(1932) 北海道農事試験場報告29 : 94

⑥野上隆史・北内義弘 (1981) 九病虫研会報 27 : 85—87

⑦病虫害の発生概況 (1955) 九病虫研会報 1 : 114

⑧昭和55年度大分県病虫害防除所発生予察特殊報第1号

⑨平成3年度宮崎県病虫害防除所発生予察特殊報第9号

⑩暖地作物病虫害防除指針（普通作偏）(2001) 九州病虫害防除推進協議会 : 60—61

## 2 イネミズゾウムシ

*Lissorhoptrus oryzophilus* Kuschel

### (わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

日本で発見された本種は、古くからアメリカ合衆国東部の原野、山林などに生息していたイネの最大の害虫と目されている rice water weevil (*Lissorhoptrus oryzophilus* Kuschel) と同一種である疑いが持たれた①。

1976年5月に愛知県の水田で初発見され、その後1982年までの6年のうちに愛知県近隣地域を中心に分布を拡大した②③。

### (九州における初発生の記録)

九州では1983年6月、福岡県大島村(離島)の早期水稻で初めて発生が確認された⑤。また、宮崎県では1984年5月に日南市他の早期水稻で確認し⑦、鹿児島県では1984年5月に指宿市を中心として52haで発生を確認している⑥。

九州各県では、1984年に佐賀県肥前町⑨、長崎県⑩、熊本県⑪、大分県⑫の各県で初発生が認められている。

### (九州における発生・拡大の経過)

1976年愛知県での初発生確認以来、僅か7ヶ年の間に発生地域が西進し九州地域にまで拡大したことは大きな驚きであった。

イネミズゾウムシは飛翔行動や稲苗による移動が殆どないことから、船舶・自動車等による輸送機関による伝搬・移動が原因と見られている③④。

水稻に対する実被害は、防除対策の徹底等により、現在あまり問題にされなくなっているが、地域によっては時にやや多の発生となることがある。

### (参考資料)

- ①渡辺 直(1976) 植物防疫 30(9): 2—6
- ②都築 仁・森田征士 他 (1977) 植物防疫 31(12): 13—16
- ③岡田斉夫(1982) 植物防疫 36(12): 21—25
- ④松井正春 (1984) 植物防疫 38(4): 8—12
- ⑤山中正博・藤吉 臨 他 (1985) 九病虫研会報 31: 106—109
- ⑥深町三朗 (1985) 九農研 47: 116
- ⑦永井清文・寺本 敏 (1985) 九病虫研会報 31: 110—114
- ⑧金城常雄・嶋田知英 他 (1986) 九病虫研会報 32: 104—109
- ⑨佐賀の植物防疫史 (1992) 佐賀県植物防疫協会: 152
- ⑩長崎県農林業試験研究100年のあゆみ (1998) 長崎県総合農林試験場: 214
- ⑪熊本県植物防疫の歩み (1992) 熊本県植物防疫協会: 129—130
- ⑫大分県植物防疫のあゆみ (1993) 大分県植物防疫協会: 42

## 3 ジャガイモガ

*Phthorimaea oprculella* (Zeller)

### (わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

アメリカ原産と云われるナス科の世界的害虫である①②③④⑤。



1953年5月に広島県川尻町のタバコに発生したのを耕作者の立花明政氏が発見し、岡山たばこ試験場へ送付されたが同定するに至らず1954年5月に岡山大学の小泉憲治氏に送り *Gnorimschema* 属であることを明らかにされ、更に浪速大学の一色知博士によって *G. operculella* であることが確認された①。

幼虫はジャガイモをはじめ、タバコ、ナス、トマト、ピーマン、ホオズキなどのナス科植物を食害する①②。

1954年に緊急防除が開始されたが、発生地域は拡大した②③。

#### (九州における初発生の記録)

1954年9月に長崎県西彼杵郡瀬川村のナスおよびタバコで発見された。

その後の調査では長崎県の2市18町村に発生分布していることが明らかとなった⑤。

1954年に福岡県⑥と佐賀県⑦のジャガイモに発生し、1959年には大分県で発生した⑧。

#### (九州における発生・拡大の経過)

1960年の発生地域は、福岡県・佐賀県・長崎県・大分県・熊本県となっている④。

福岡県・佐賀県・長崎県のジャガイモ産地で同時期に発生が認められていることから、種芋による移動が主な発生要因とされている⑤。

現在は、九州各県で発生が認められているが、国・県・市町村等の防除対策により、圃場では大きな発生・被害は見られない。ただ、時により貯蔵中に発生・加害が見られる⑩。

#### (参考資料)

①大島俊市・内藤孝道 (1955) 農業及園芸 養賢堂 30(10) : 68—70

②中田正彦 (1954) 植物防疫 8(12) : 1—3

③小泉憲治・大島俊市 (1954) 植物防疫 11(11) : 1—7

④清水四郎 (1960) 植物防疫 14(10) : 24—28

⑤森 常也・樋口泰三 (1955) 九病虫研究会報 1 : 97—99

⑥福岡県植物防疫のあゆみ (1995) 福岡県植物防疫協会 : 16

⑦佐賀の植物防疫史 (1992) 佐賀県植物防疫協会 : 151

⑧大分県植物防疫のあゆみ (1993) 大分県植物防疫協会 : 52

⑨梅谷献二・岡田利承 (2003) 日本農業害虫大事典 全農教 : 263—264

⑩暖地作物病害虫防除指針 (野菜作偏) (1996) 九州病害虫防除推進協議会 : 392—393

## 4 スクミリングガイ (旧名：ラプラタリングガイ)

*Pomacea canaliculata* Lamarck

#### (わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

原産地は南米と云われ1980年頃、台湾から食用として養殖されはじめたが養殖場から逃げ出し野生化した①②③⑬⑭。

1984年以来、イネ、レンコン、イグサ、ミズイモなどの水田作物を加害する有害動物として沖縄・九州各県を中心に分布を拡げ農業上問題となっている①②③⑬⑭。

#### (九州における初発生の記録)

1980年頃から養殖業者により食用として増殖されたが、1982年には宮崎県のイネ⑩⑭、1983年に福

岡県用の排水路⑭、1983年に熊本県のイネ⑭、1984年に佐賀県のイネ②⑭と、鹿児島県のイネ⑪⑭、1985年に長崎県のイネとレンコン⑭および、大分県のイネ⑨⑭で発生が確認されている。

#### (九州における発生・拡大の経過)

現在は九州各県の水田・溝・溜池等で発生がみられる。水稻の浸冠水する水田では、稚稲時の茎葉が食害を受けて植え直しの被害となることがある。特に直播水稻では実害が大きい③。

その他の作物でも茎葉の食害により、生育阻害の要因となる①、また、卵塊は見た目の悪さから嫌われている。

他方、水稻本田の雑草防除に活用する農家もあるが、生態系への影響は不明の部分もあり、未発生地域への導入は行わないようにしなければならない。

#### (参考資料)

- ①宮原義雄・平井剛夫 他 (1986) 植物防疫 40(1) : 31 —35
- ②菖蒲信一郎 (1996) 植物防疫 50(6) : 3 —9
- ③和田 節(1997) 植物防疫 51(10) : 5 —8
- ④平井剛夫・大矢慎吾 他 (1986) 九病虫研究会報 32 : 88 —91
- ⑤大矢慎吾・平井剛夫 他 (1986) 九病虫研究会報 32 : 92 —95
- ⑥清田洋次・奥原國英 (1987) 九病虫研究会報 33 : 102 —105
- ⑦佐賀の植物防疫史 (1992) 佐賀県植物防疫協会 : 152
- ⑧熊本県植物防疫の歩み (1992) 熊本県植物防疫協会 : 130
- ⑨大分県植物防疫のあゆみ (1993) 大分県植物防疫協会 : 42
- ⑩宮崎県植物防疫のあゆみ (1995) 宮崎県植物防疫協会 : 29
- ⑪鹿児島県植物防疫のあゆみ (1994) 鹿児島県植物防疫協会 : 54
- ⑫沖縄県植物防疫協会のあゆみ (2001) 沖縄県植物防疫協会 : 135
- ⑬村上興正・鷲谷いずみ (2002) 外来種ハンドブック : 171
- ⑭ラプラタリンゴガイ防除対策検討会資料 (1985) 農林水産省植物防疫課

## 5 シロヒトリ

*Arctiidae caja phaeosomma*

#### (わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

古くから雑草等の一般昆虫として生息していたと考えられる。幼虫はスバ、ギシギシ、タンポポなどいろいろな雑草を食べる。時に大発生して、農作物を加害するようであるが被害についての十分な調査資料はない。

#### (九州における初発生の記録)

栽培作物への加害は大発生時に偶発的に起こっていたものと推察されるが、1986年に福岡県でビールムギに対する発生・加害を初見した①。

#### (九州における発生・拡大の経過)

福岡県以外には、農作物での発生・加害の報告はない。



(参考資料)

①山中正博・藤吉 臨 他 (1986) 九病虫研究会報 32 : 123 —126

## 6 ナガムギカスミカメ

*Stenodema sibiricum* Bergroyh

(わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

イネ科植物で繁殖することから、一般昆虫として古くから生息していたとも考えられる。山地のイネ科植物で生活しているが、時に水田に侵入してイネの穂を吸汁する①。

1972年に斑点米を産出することが広島県、島根県、鳥取県で認められた①。

(九州における初発生の記録)

1974年に大分県で水稻の斑点米を生じることが確認された②。

(九州における発生・拡大の経過)

九州地域では、クモヘリカメムシ等の大型のカメムシによる斑点米が問題にされていたが、近年の調査では北方系の小型のカメムシ類の発生が認められている。

(参考資料)

①友国雅章 (1993) 日本原色カメムシ図鑑 全農教 : 149、270

②大分県植物防疫のあゆみ (1993) 大分県植物防疫協会 : 221

## 7 ニワトコフクレアブラムシ

*Aulacorthum magnoliae* Essig et Kuwana

(わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

ソラマメ、ナス、ジャガイモ、ヒルガオ、アサガオ、カンキツ類、ナシ、クリ、ユリなど多くの野菜や果樹に寄生する①。

(九州における初発生の記録)

1964年に長崎県、鹿児島県の両県のバレイショで発生が初めて確認された②。

(九州における発生・拡大の経過)

現在、長崎県・鹿児島県以外のバレイショでの発生は未確認である。

(参考資料)

①梅谷献二・岡田利承 (2003) 日本農業害虫大事典 全農協 : 101

②安田壮平・坂口壮一 (1966) 九病虫研究会報 12 : 9 —13

## 8 ミナミアオカメムシ

*Nezara viridula* (Linnaeus)

(わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

広食性で多くの植物を吸汁する。またイネの穂を吸汁して斑点米を産出する ①②。

(九州における初発生の記録)

水稲の害虫として宮崎県では1963年に越冬について調査されている②③。

(九州における発生・拡大の経過)

主として鹿児島県、宮崎県など南九州各県で発生が多いカメムシであるが、近年は熊本県・佐賀県・福岡県でも水田で発生が見られ、斑点米防止対策が必要となっている④。

福岡県では2002年5月に小麦ほ場で成虫・幼虫の発生を見ている⑤。

(参考資料)

①友国雅章 (1993) 日本原色カメムシ図鑑 全農協：230

②鮫島徳三・永井清文 (1963) 宮崎県総合農試研報 2：40—51

③崎村弘・永井清文 (1976) 九病虫研会報 22：91—94

④暖地作物病虫害防除指針（普通作編）(2001) 九州病虫害防除推進協議会：56—57

⑤平成14年度福岡県病虫害防除所発生予察特殊報第1



## 畑作物、飼料作物の部

### 1 アリモドキゾウムシ

*Cylas formicarius* (Fabricius)

(わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

サツマイモを加害する大害虫で熱帯・亜熱帯地方に分布する。わが国では沖縄県で1903年に初めて被害が報告されているので、それ以前に侵入していたと思われる①②③。

(九州における初発生の記録)

鹿児島県奄美群島の与論島で1915年に初めて発生が確認され、1940年には群島全域に分布を拡大した。現在北緯30度に位置する鹿児島県トカラ列島の口之島以南の南西諸島と小笠原諸島が分布域で、法律上有害動植物(特殊害虫)に指定され寄主植物であるサツマイモなどヒルガオ科植物は未発生地へ移出できない。④⑤⑥。

(九州における発生・拡大の経過)

奄美群島以北の鹿児島県の各地(種子島、屋久島、山川町、鹿児島市)にたびたび侵入し、そのつど化学薬剤や寄主植物除去等による緊急撲滅防除で撲滅されている⑦⑧⑨。

(参考資料)

- ①小濱継雄・高原健二(2002) 沖縄博物館紀要 28: 55—92
- ②名和梅吉(1903) 昆虫世界 7: 327—330
- ③高良鉄夫(1955) 植物防疫 9(7): 17—22
- ④栄 政文(1961) 奄美の生物研報告 大島支庁教育事務所: 77—95
- ⑤栄 政文(1968) 鹿児島農試大島支場65周年記念誌: 28—57
- ⑥栄 政文(1988) 奄美諸島の病虫害 互助印刷: 146—150
- ⑦瀬戸口 脩(1990) 植物防疫 44(3): 5—8
- ⑧瀬戸口 脩(2002) 奄美の農業害虫 トップコピー: 37—42
- ⑨Setokuchi, O., K. Kawsoe et al. (1996)  
Proc. Int. Work. Pest Mang. Str. Asia Mon.: 197—207

### 2 アルファルファタコゾウムシ

*Hypera postica* (Gyllenhal)

(わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

1982年に福岡県福岡市と沖縄県で発見され①②、その後、分布を拡大した。現在、岐阜県以西の26府県と、2001年に東京都で発生が確認され、栃木、茨城、埼玉、群馬など関東平野に分布拡大している。

(九州における初発生の記録)

1982年の福岡県と沖縄県の発生に続き、1985年佐賀県④、1987年長崎県⑥、1988年熊本県と鹿児島県、1989年大分県と宮崎県③⑦のレンゲ、ウマゴヤシ、カラスノエンドウなどのマメ科植物で分布拡大してきた。

#### (九州における発生・拡大の経過)

レンゲの害虫であるが多発生地では、新成虫がキュウリ、メロンなど農作物を食害した事例がある。また、本種の防除のため寄生蜂の導入放飼が実施され、ヨーロッパトビチビアメバチの定着が確認されている④。

#### (参考資料)

- ①森本 桂 (1987) 環境管理技術 5 : 1 - 3
- ②木村秀徳・奥村正美 他 (1988) 植物防疫 42 (10) : 498-501
- ③林川修二 (1999) 植物防疫 53 (10) 31-34
- ④灰塚繁和・山津憲治 他 (1990) 九病虫研究会報 36 : 192-194
- ⑤山口卓宏・井上栄明 他 (1991) 九病虫研究会報 37 : 204-208
- ⑥寺本 健・横溝徹世敏 他 (1993) 九病虫研究会報 39 : 146-149

### 3 イッポンセスジスズメ

*Theratra pinastrina* Martyn

#### (わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

わが国では、沖縄、九州各県、山口県に分布が知られていたが、希な種であった①②。

#### (九州における初発生の記録)

九州で稀に発生が認められていたが、1975年頃から南九州のサトイモの多くの品種で発生が見られ、被害が多くなった③④。その後、九州では所によっては多発生することがある。

#### (九州における発生・拡大の経過)

発生分布の拡大は調べられていないが、南九州では時々大発生の畑が見られる。

#### (参考資料)

- ①素木得一 他 (1944) 台湾農家便覧 : 1265
- ②井上寛・岡野磨瑳郎 他 (1967) 原色昆虫大図鑑 (第1巻) 北隆館 : 91
- ③小芦健良・田中 章 (1979) 九病虫研究会報 25 : 84-87
- ④小芦健良・田中 章 (1983) 鹿児島農試研究報告 11 : 103-117

### 4 イモゾウムシ

*Euscepes postfasciatus* (Fairmaire)

#### (わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

サツマイモを加害する害虫で熱帯地方に分布する。わが国では1947年に沖縄県で初発見され、7年後には沖縄全域に分布を拡大した①②③。

法律上有害動植物(特殊害虫)に指定され、寄主植物であるサツマイモなどヒルガオ科植物は未発生地へ移出できない。

#### (九州における初発生の記録)

鹿児島県奄美群島では1966年に沖永良部島と与論島ではほぼ同時に初発見された⑦⑧。徳之島、奄美大島、喜界島の北3島は1986年までは発見されていなかったが、現在は奄美群島全域に分布している



④⑤⑥⑩。最北の喜界島での発生は少ない。

#### (九州における発生・拡大の経過)

奄美群島以北では1997年に屋久島に侵入したが、化学薬剤や寄主植物除去等による緊急撲滅防除で2003年に撲滅された⑩。

#### (参考資料)

- ①安里清景 (1950) 国頭農報 8:5-11
- ②小濱継雄・髙原健二 (2002) 沖縄博物館紀要 28:55-92
- ③高良鉄夫 (1954) 植物防疫 8 (10):18-20
- ④宮路克彦・田中文雄 (1998) 九病虫研会報44:88-92
- ⑤三宅 雄 (1968) 九州植防:297
- ⑥大原謙二・三島重治 (2000) 植防調査研報36:67-70
- ⑦栄 政文 (1968) 鹿児島農試大島支場65周年記念誌:28-57
- ⑧栄 政文 (1988) 奄美諸島の病害虫 互助印刷:146-150
- ⑨瀬戸口 脩 (2002) 奄美の農業害虫 トップコピー:37-42
- ⑩末永利夫 他 (1987) 九病虫研会報 35:116-118
- ⑪西岡稔彦・川崎修二 他 (2000) 植物防疫 54 (11):6-10

## 5 カンシャコバナナガカメムシ

*Caverelius saccharivorus* (Okajima)

#### (わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

主にサトウキビの芯葉部を吸汁加害するカメムシで英名のチンチバグとも呼ばれる。わが国では1914年に沖縄本島で発見された。台湾から導入されたサトウキビの苗とともに持ち込まれたとされている。1920年代には八重山諸島、1957年頃は大東島に分布を拡大した①②。

#### (九州における初発生の記録)

鹿児島県奄美群島へ侵入したのは1916年と推定され、沖永良部島で発見された。その後1951年には奄美群島全域に分布を拡大した③④。

#### (九州における発生・拡大の経過)

奄美群島以北では種子島や屋久島、鹿児島県本土でも発生した例があるが、現在の発生状況は不明である⑤⑥。

#### (参考資料)

- ①東 清二 (1977) 琉球大農学学術報 24:1-158
- ②小濱継雄・髙原健二 (2002) 沖縄博物館紀要 28:55-92
- ③栄 政文 (1968) 鹿児島農試大島支場65周年記念誌:28-57
- ④栄 政文(1988) 奄美諸島の病害虫 互助印刷:146-150
- ⑤瀬戸口 脩 (2002) 奄美の農業害虫 トップコピー:37-42
- ⑥栄 政文・松田鋤男 (1965) サトウキビ病害虫図説 甘味資源振興会:47-49

## 6 カンシャクシコメツキ類

オキナワカンシャクシコメツキ

*Melanotus okinawensis* (Ohira)

サキシマカンシャクシコメツキ

*Melanotus sakishimensis* (Ohira)

### (わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

幼虫のハリガネムシがサトウキビの地下芽子部を食害する。沖縄県と奄美群島ではかなり以前から分布していたと思われるが、初発生の記録は判然としない。土壌中で2～3年の長期間生活するため株出し可能なサトウキビ品種 (POJ2725) が導入された昭和初期から害虫として注目された②③④。従来、沖縄県と鹿児島県奄美群島に分布するカンシャクシコメツキ類は1種とされていたが、1982年に3種に分類され、オキナワカンシャクシコメツキは沖縄本島や奄美群島の喜界島、奄美大島、徳之島に、サキシマカンシャクシコメツキは沖縄県の先島列島と奄美群島の沖永良部島及び与論島に分布することが明らかとなった①。両種とも奄美群島以北には分布していない。

### (九州における初発生の記録)

鹿児島県奄美群島においては1940年頃にカンシャクシコメツキの被害が観察されているが、現在のどの種に属するのかわからない④。群島内のカンシャクシコメツキ類の分類と分布が明らかになったのは1982年である①。なお、サトウキビ害虫として徳之島、沖永良部、与論島にリュウキュウシコメツキ、与論島を除く北部4島にはスジマダラチビコメツキも分布する③④。

### (九州における発生・拡大の経過)

上記4種とも奄美群島以北での発生は確認されていない。

### (参考資料)

- ①Ohira, H. (1982) Assn. Mem. Iss. Emer. Prof. M. Chujo, Nagoya.
- ②里見卓生 (1980) 熱帯農研集報 39: 25-28
- ③瀬戸口 脩 (1990) 鹿児島農試研報 18: 11-19
- ④瀬戸口 脩 (2002) 奄美の農業害虫 トップコピー: 15-17

## 7 サツマイモノメイガ

*Omphis anastomosalis* (Guenee)

### (わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

サツマイモを加害する鱗翅目害虫で、熱帯地方に分布する。わが国では1941年頃に沖縄県の波照間島に台湾から持ち込まれたのが最初といわれている。その後、約10年間で沖縄全土に分布を広げた①。

本虫は法律上有害動植物 (特殊害虫) に指定され、寄主植物であるサツマイモなどヒルガオ科植物は未発生地へ移出できない

### (九州における初発生の記録)

鹿児島県奄美群島では1961年に奄美大島で成虫が、1965年にはほ場での被害が確認され1966年には奄美全域に分布していることが判明した②③④⑤。現在はトカラ列島以南が分布域で、奄美大島の中部を境に南方に向かうほど発生が多い傾向にある⑥。



(九州における発生・拡大の経過)

奄美群島以北での発生は確認されていない。

(参考資料)

- ①小濱継雄・高原健二 (2002) 沖縄博物館紀要 28:55-92
- ②栄 政文 (1988) 奄美諸島の病害虫 互助印刷:132-134
- ③栄 政文・嶋田治一 他 (1966) 九病虫研究会報 12:52-54
- ④瀬戸口 脩・末永利夫 (1987) 九病虫研究会報 33:241
- ⑤瀬戸口 脩 (2002) 奄美の農業害虫 トップコピー:44-45
- ⑥末永利夫・上門隆洋 (1989) 九州病虫研究会報 35:190

## 8 サトウキビネワタムシ

*Geoica lucifuga* (Zehntner)

(わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

インドや台湾でサトウキビ根部寄生アブラムシとして著名であるが、わが国では関東地方で陸稲害虫として1961年に初記録された①。有翅虫の発生は未確認で越冬一次寄主植物も明らかでないため少なくとも関東地方以南には分布していると推定される。

(九州における初発生の記録)

サトウキビ害虫として1993年に奄美大島で発生の記録がある②③。

(九州における発生・拡大の経過)

沖縄を含め奄美大島以外の九州からでの発生は確認されていない。

(参考資料)

- ①田中 正 (1961) 宇都宮大農学学術報 10:1-83
- ②瀬戸口 脩 (1989) 鹿児島農試研報24:1-75
- ③瀬戸口 脩 (1993) 応動昆学会報 37:159-162

## 9 ソルガムタマバエ

*Stenodiplosis sorghicola* (Coquillett)

(わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

世界各地の熱帯から亜熱帯に広く分布していたが、現在は南北とも緯度40度の温帯地域まで分布を広げている。本種はアフリカやアメリカなどで不稔の原因として被害が著しい害虫である①。

1969年9月に鹿児島県でソルガムの穂から羽化した成虫が最初に発見された②。

(九州における初発生の記録)

1969年9月に鹿児島県鹿屋市のソルガムで最初に発見された②。

(九州における発生・拡大の経過)

鹿児島県以外での発生の記録はない。

(参考資料)

- ①湯川淳一・栴田 長 (1996) 日本原色虫えい図鑑 全農教：312
- ②湯川淳一・田中 章 (1976) 九病虫研会報 22：136-139

## 10 テンサイトビハムシ

*Chaetocnema concinna* (Marsham)

(わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

国内では、北海道、本州、四国、九州に分布し、九州では、福岡、宮崎、対馬に分布が認められている。国外では、ヨーロッパ、台湾、韓国、モンゴル、中央アジア、シベリア等に分布する。本種は北海道ではテンサイの害虫であったが①②、1989年9月に鹿児島県種子島のカンショで本種の成虫による加害が確認された。

(九州における初発生の記録)

福岡、宮崎、対馬で分布が認められていたが、食草については不明であった。1989年鹿児島県種子島のカンショで本種の成虫が大発生した③。

(九州における発生・拡大の経過)

1990年2～3月の調査で、沖縄県石垣島、鹿児島県与論島、奄美大島でもカンショやヒルガオ科の野生植物で本種と思われる成虫の発生を観察しており、南西諸島にも広く分布していると思われる。その他の九州各地にも分布するものと考えられる。

(参考資料)

- ①GRESSITT, L, and S, KIMOTO (1963) Pacific Insects Monograph IB：301-1026
- ②Kimoto, S. (1964) J. Fac. Agric. Kyushu Univ. Vol13：409-429
- ③田中 章・肥後三郎 他 (1990) 九病虫研会報 36：120-122

## 11 ヒエノアブラムシ

*Melanaphis sacchari* (Zehntner)

(わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

イネ科に寄生するアブラムシで、カンショアブラムシ、カンショノキアブラムシ、ススキアブラムシの和名もある。わが国ではかなり以前から分布していたと推定されるが、近似種が多く分類的に混乱していたこともあり現在の種 (species) として記録されたのは1965年に関西地方で報告されたのが最初である④。

農業害虫としては1965年に奄美大島でサトウキビへの寄生が報告され②、1980年には中国地方でイネへの寄生も報告されたが、飼料作物ソルガムの導入に伴いその特異的な寄生性が注目され害虫として重要視されるようになった①③。わが国全土に分布する。

(九州における初発生の記録)

農業害虫としては1965年にカンショノキアブラムシの和名で奄美大島のサトウキビで寄生が認められたのが最初である(②)。ソルガム害虫としては1973年に南九州で初発生が確認された③。

(九州における発生・拡大の経過)

ソルガムの害虫として九州全土に発生しているが分布拡大の経過は判然としない。

(参考資料)

- ①Moritsu, M. et al. (1971) Bull. Fac. Agr. Yamaguchi Univ. 22:209-214
- ②柴 政文・松田鋤男 (1965) サトウキビ病害虫図説 甘味資源振興会:41
- ③瀬戸口 脩 (1973) 九州病虫研究会報 19:95-97
- ④Sorin, M. (1970) Ins. Matsumurana Suppl.8:5-17

## 12 ヨツモンカメノコハムシ

*Lacoptera quadrimaculata* (Thunberg)

(わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

本種は、カンショの葉を食害し、南方系の種で台湾、沖縄で記録されていた①②。

(九州における初発生の記録)

1995年に鹿児島県奄美大島で認められ、九州本土では1999年に長崎県長崎市のカンショで初見され、成虫で越冬していると考えられた②④。

2002年5月には鹿児島県川辺町のカンショで発生を確認し③、その後、知覧町、枕崎市で発生しているのを認めた。

(九州における発生・拡大の経過)

鹿児島県では、その後も被害が拡大し、今後、カンショ害虫として大きな問題になることが心配されている。また、北部九州の長崎県でも発生し越冬することが確認されたことから各県に分布が拡大する恐れがある。

(参考資料)

- ①木元新作・滝沢春雄 (1994) 日本産ハムシ類幼虫成虫分類図説
- ②山元宣征・和田義人 (2001) GEKKAN-MUSHI368:11-14
- ③平成11年度鹿児島県病虫害防除所発生予察特殊報第2号
- ④小川恭弘 (2003) 今月の農業 47(8):26-30



## 野菜・花きの部

### 1 アキニレハマキワタムシ

*Eriosoma sp.*

(わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

イチゴの細根部に寄生するネアブラムシである。外観はオカボクロアブラムシによく似ている①。

(九州における初発生の記録)

1998年に福岡県のイチゴで発生が初見された②。

(九州における発生・拡大の経過)

福岡県以外に発生の記録はない。また、現在の発生状況も不明である。

(参考資料)

①森津孫四郎 (1983) 日本原色アブラムシ図鑑 全農教：458

②福岡県植物防疫最近10年間の動き (2002) 福岡県植物防疫協会：5

### 2 アシヒダナメクジ

*Eleutherocaulis alte* Ferssac

(わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

熱帯・亜熱帯地方に分布する陸生貝類のナメクジで、野菜や果樹類を食害する。広東住血線虫の中間寄主でもあり衛生上の有害動物でもある。

日本本土で繁殖可能かどうか明らかでない。今のところ分布域からの移動規制対象動物にはなっていない。

(九州における初発生の記録)

沖縄以北においては鹿児島県奄美群島の徳之島で1969年に初めて発生が確認された①②。

(九州における発生・拡大の経過)

奄美群島以北での発生は確認されていない。

(参考資料)

①栄 政文 (1968) 鹿児島農試大島支場65周年記念誌：76-80

②栄 政文 (1988) 奄美諸島の病害虫 互助印刷：150-152

### 3 アシビロヘリカメムシ

*Leptoglossus australis* (Fabricius)

(わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

野菜類や果樹の果実、茎葉を吸汁加害する大型のカメムシで亜熱帯地方に分布する。わが国においては古くから沖縄県で発生がみられ南方からの侵入害虫かどうか不明である。①。

アフリカ、インド、東南アジア、インドネシア、北部オーストラリア、フィリピン、台湾、太平洋諸島など世界の熱帯圏に広く分布し、わが国では奄美大島以南の南西諸島に分布する②。

#### (九州における初発生の記録)

鹿児島県奄美大島と徳之島に分布するが、屋久島においても発生の観察例がある。また、平成16年8月には長崎県小浜町のニガウリで初発生が確認された③。

#### (九州における発生・拡大の経過)

鹿児島県の南西諸島以外にも長崎県で初発生が確認されたことから、今後は他県でも発生する可能性がある。

#### (参考資料)

- ①安田耕司 (1989) 植物防疫 43 (2) : 20-22
- ②安田耕司・鶴町昌市 (1990) 九病虫研会報 36 : 143-145
- ③平成16年度長崎県病虫害防除所発生予察特殊報第2号

## 4 アフリカマイマイ

*Achatina fulica* (Bowdich)

#### (わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

野菜類を中心に各種農作物を食害する陸産貝類で、熱帯・亜熱帯地方に分布する。広東住血線虫の中間寄主で衛生上の有害動物でもある。

わが国には沖縄県に薬用あるいは食用として1928年頃か1930年代に台湾から持ち込まれたようである①②。

#### (九州における初発生の記録)

鹿児島県奄美群島には1937年から約10年間にわたり薬用あるいは食用として沖縄県から持ち込まれた経緯がある。現在、奄美群島全域に分布し、わが国の分布の北限となっており、法律上移動規制対象動物に指定されている③④。

沖縄以北においては1959年に沖縄から奄美群島の徳之島へ侵入したのを始め、1971年には奄美大島へサトウキビ苗、1977年には沖永良部島にヤシの苗とともに持ち込まれるなど人の往来によって奄美群島に侵入した③④。

#### (九州における発生・拡大の経過)

奄美群島以北での発生は確認されていない④。

#### (参考資料)

- ①知念盛俊 (1997) 沖縄の帰化動物 沖縄出版 : 122-124
- ②長山正利 (1964) 琉球農試研報 1 : 85-90
- ③栄 政文 (1968) 鹿児島農試大島支場65周年記念誌 : 28-57
- ④栄 政文 (1988) 奄美諸島の病虫害 互助印刷 : 146-150

## 5 インゲンハモグリバエ

*Ophiomyia phaseoli* (Tryon)

#### (わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

インゲンマメのほかにアオイマメ、ツルナシインゲン、アズキ、ササゲを好む。九州（鹿児島県）、

沖縄諸島および台湾、東南アジア、インドネシア、ミクロネシア、ハワイ、オーストラリアに広く分布する①。

1961年に沖縄県のインゲンマメで発生が初見された②。

(九州における初発生の記録)

1985年に鹿児島県金峰町のインゲンマメで発生が初見された③。

(九州における発生・拡大の経過)

鹿児島県以外に発生の記録はない。また、現在の発生状況も不明である。

(参考資料)

①梅谷献二・岡田利承 (2003) 日本農業害虫大事典 全農教：125

②安田慶次 (1979) 九病虫研究会報 25：107-109

③原 次夫・堀元 学 他 (1986) 九病虫研究会報 32：134-135

## 6 ウスモンミドリカスミカメムシ

*Taylorilygus apicalis* (Fieber)

(わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

キクのほかダリア、ウリ類やナスにも加害し、被害は軽視出来ない。  
本州、九州、沖縄および汎世界に分布する①。

(九州における初発生の記録)

キクでは1998年に佐賀県で発生が初見された②。

レタスでは1999年に福岡県で発生が初見された③。

(九州における発生・拡大の経過)

佐賀県と福岡県以外に発生の記録はないが、他県でも発生していると思われる。なお、佐賀県農技防センターの口木（私信）によると、佐賀県のキクでは現在も発生し問題となっている。

(参考資料)

①梅谷献二・岡田利承 (2003) 日本農業害虫大事典 全農教：731

②中村宏子・太田政隆 他 (2002) 九病虫研究会報 48：103

③福岡県植物防疫最近10年間の動き (2002) 福岡県植物防疫協会：5

## 7 ウリミバエ

*Dacus cucurbitae* Coquillett

(わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

ミカンコミバエとほぼ同じ分布で、ウリ類その他の野菜の害虫として知られる。わが国では、沖縄県で1919年八重山群島、ついで1929年に宮古群島で発生が確認された。その約40年後の1970年6月に久米島で発見され1972年沖縄本島から次々に北上拡大した①②③。



### (九州における初発生の記録)

鹿児島県奄美群島における発見は、1973年9月与論島と沖永良部島、1974年7月徳之島、さらに8月に奄美大島、喜界島、1975年トカラ列島、1979年には種子島、屋久島まで拡大した。そのため、国は1975年奄美群島全域をウリミバエ発生地域に指定した④。

### (九州における発生・拡大の経過)

鹿児島県は国の助成を受けて、1979年から10年計画で不妊虫放飼法による根絶防除事業を行い、喜界島は1985年、奄美大島は1987年、徳之島、沖永良部島、与論島は1989年に根絶が達成された⑤。沖縄県でも同様に1993年根絶された⑥。

### (参考資料)

- ①伊波興清 (1971) 植物防疫 25 (11) : 25-29
- ②伊藤嘉昭・宮良安正他 (1973) 九病虫研究会報 19 : 108-111
- ③井上一人 (1974) 九州植物防疫 第362 : 3
- ④嶋田治一・牧野 晋 他 (1976) 九病虫研究会報 22 : 146-148
- ⑤鹿児島県ウリミバエ防除対策室 (1991) ウリミバエ根絶記念誌 : 1-122
- ⑥沖縄県農林水産部 (1994) 沖縄県ミバエ根絶記念誌 : 1-349

## 8 オンシツコナジラミ

*Trialeurodes vaporariorum* (Westwood)

### (わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

キュウリ、ナス、カボチャ、トマトなどの果菜類、ポインセチア、ランタナ、ペラルゴニウム、フクシア、ガーベラ、サルビアなどの花卉類、キク科の雑草など非常に多くの植物に寄生増殖する。わが国では1974年に確認された侵入害虫で、10年を経ずして全国に広まった。原産地は諸説あるが北アメリカ西～南西部というのが有力。現在では汎世界的に分布を拡大している①。

1974年に広島県東広島市のキュウリで発生が初見された②。

### (九州における初発生の記録)

ポインセチアでは1975年に福岡県久留米市で発生が初見された③。トマトでは1975年に大分県④、1979年に鹿児島県大口市⑤で発生が初見された。長崎県では1976年に野菜、花きで発生が初見された⑥。

キュウリでは1977年に宮崎県綾町⑦と佐賀県佐賀市⑧で発生が初見された。熊本県松橋町では1977年にナス科野菜で発生が初見された⑨。

### (九州における発生・拡大の経過)

1975年に福岡県で初発生を見て以来、数年間で九州各県に分布が拡大した。現在では後述のシルバーリーフコナジラミとともに施設の野菜、花卉における重要な害虫となっている。

### (参考資料)

- ①梅谷献二・岡田利承 (2003) 日本農業害虫大事典 全農教 : 115
- ②中村啓二・中沢啓一 (1975) 植物防疫 29 (1) : 7-10
- ③福岡県植物防疫のあゆみ (1995) 福岡県植物防疫協会 : 20
- ④大分県植物防疫のあゆみ (1993) 大分県植物防疫協会 : 55

- ⑤鹿児島県植物防疫のあゆみ (1994) 鹿児島県植物防疫協会：79
- ⑥長崎県植物防疫30周年記念誌 (1982) 長崎県植物防疫協会：20、158
- ⑦宮崎県植物防疫のあゆみ (1995) 宮崎県植物防疫協会：34
- ⑧佐賀県の植物防疫史 (1992) 佐賀県植物防疫協会：152
- ⑨熊本県植物防疫の歩み (1992) 熊本県植物防疫協会：56、276

## 9 カギアシゾウムシ

*Bagous bipunctatus* Kono

(わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

分布は北海道、本州、四国、朝鮮①。

(九州における初発生の記録)

1976年に熊本県天草南部のキュウリで発生が初見された①。

(九州における発生・拡大の経過)

熊本県以外に発生の記録はない。なお、元熊本農試の奥原（私信）によると初発生地熊本県天草では現在、栽培体系が変わりキュウリの栽培面積が縮小しており、発生していない。

(参考資料)

- ①中根猛彦・大林一夫 他 (1984) 原色昆虫大図鑑 (第2巻) 北隆館：364
- ②奥原國英・重永知明 他 (1980) 九病虫研会報 26：181

## 10 カキノヒメヨコバイ

*Empoasca nipponica* Dworakowska

(わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

カキノほかナシ、リンゴ、ササゲ、フジ、ダリア、ヒマワリ、ヤツデ、アジサイなどの芽の発育障害や葉の枯れ上がりの原因となる①。

2002年に佐賀県佐賀郡のイチゴで発生が初見された②。

(九州における初発生の記録)

イチゴでは上記以外に発生の記録はない。

(九州における発生・拡大の経過)

イチゴでは佐賀県以外に発生の記録はない。佐賀県農技防センターの口木（私信）によると、佐賀県では平坦部を中心に、イチゴの育苗期に葉に寄生加害して、葉の奇形の原因となっている。

(参考資料)

- ①梅谷献二・岡田利承 (2003) 日本農業害虫大事典 全農教：313
- ②近藤知弥・葛蒲信一郎 他 (2004) 九病虫研会報 50：112

## 11 カボチャミバエ

*Bactrocera depressa* (Shiraki)

### (わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

キカラスウリを主要寄主とするが、カボチャをはじめ、ユウガオ、キュウリ、トマトなどの作物も加害する。日本全国および朝鮮半島、台湾に分布する①。

### (九州における初発生の記録)

1986年に長崎県豊玉町のカボチャで発生が初見された②。

### (九州における発生・拡大の経過)

長崎県以外に発生の記録はない。また、現在の発生状況も不明である。

### (参考資料)

①梅谷猷二・岡田利承 (2003) 日本農業害虫大事典 全農教：223

②長崎県植物防疫40周年記念誌 (1990) 長崎県植物防疫協会：21

## 12 グラジオラスアザミウマ

*Thrips simplex* (Morison)

### (わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

現在本州、四国、九州に分布する。国外では温帯アジアを除く世界各地に分布し、多くの国でグラジオラスの重要害虫となっている①。

1985年に茨城県阿見町と静岡県南伊豆のグラジオラスで相次いで発生が初見された②。

### (九州における初発生の記録)

1987年に鹿児島県沖永良部島のグラジオラスで発生が初見された③。

### (九州における発生・拡大の経過)

鹿児島県以外に発生の記録はない。なお、元鹿児島県専技の牧野（私信）によると、現在、鹿児島県与論島でも発生しているが、本土での発生は認めていない。

### (参考資料)

①梅谷猷二・岡田利承 (2003) 日本農業害虫大事典 全農教：718

②中垣至郎 (1993) 植物防疫 47 (3)：15-17

③鹿児島県植物防疫のあゆみ (1994) 鹿児島県植物防疫協会：267

## 13 クロスジヒメアツバ

*Schrankia costaestrigalis* (Stephens)

### (わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

分布は本州、九州、トンキン、欧州①。

### (九州における初発生の記録)

1992年に鹿児島県南種子町のソラマメで発生が初見された②。



#### (九州における発生・拡大の経過)

鹿児島県以外に発生の記録はない。また、現在の発生状況も不明である。

#### (参考資料)

- ①井上 寛・岡野磨瑳郎 他 (1985) 原色昆虫大図鑑 (第1巻) 北隆館：155
- ②平成5年度鹿児島県病害虫防除所発生予察特殊報第1号

### 14 クロトビカスミカメ

*Halticus insularis* Usinger

#### (わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

成・幼虫がナス、パセリ、ダイズ、ラッカセイ、クズ、クローバーなどのマメ科牧草、ダイコンなどを加害することが知られている。対馬、南西諸島に分布する①。

#### (九州における初発生の記録)

1997年に鹿児島県鹿児島市の葉菜類で発生が初見された②。

#### (九州における発生・拡大の経過)

鹿児島県以外に発生の記録はない。また、現在の発生状況も不明である。

#### (参考資料)

- ①梅谷猷二・岡田利承 (2003) 日本農業害虫大事典 全農教：100
- ②平成10年度植物防疫事業成績書 (鹿児島県病害虫防除所)：125

### 15 クロテンオオメンコガ

*Opogona sacchari* (Bojer)

#### (わが国における初発生の記録と発生・拡大の経過)

海外ではBanana Mothと呼ばれ、バナナ、サトウキビ、観賞用植物等の害虫として知られており、アフリカおよびその周辺の島々、ヨーロッパ、西インド諸島、ブラジル、アメリカ南部など世界各地から報告があるが、アジアからの記録は非常に少なかった。本種は少なくとも本州、四国、九州の一部の温暖な地域から沖縄にかけて限定的に発生を繰り返していると考えられる①。

#### (九州における初発生の記録)

1997年に熊本県益城町のドラセナ、セローム、ユリ、チューリップで発生が初見された①。

#### (九州における発生・拡大の経過)

熊本県以外に発生の記録はない。また、現在の発生状況も不明である。

#### (参考資料)

- ①吉松慎一・宮本泰行 他 (2004) 応動昆会報 48 (2)：135-139